仕事が楽しい人Ｆｉｌｅ．１５：水上篤さん（農業）

◆水上さんが農業で目指していること

「平堀さん、野菜を食べて、嫌な苦味を感じるときはないですか？」

「この苦味は、野菜そのものの味ではなく、化学肥料の味なんですよ。」

私は、有機栽培の野菜の方が甘味が強く、滋養味に溢れていて美味しいと、経験上認識していましたが、苦味が化学肥料の味だとは知りませんでした。

この話をしながら水上さんは、変色したイチゴをテーブルの上に置きました。

そこには、

干からびてはいるものの、原形をとどめたイチゴと

溶けてドロドロになり、原形がなくなったイチゴ

が乗せられていました。

このイチゴを見せて、水上さんは、

「水耕栽培は、イチゴや野菜に無理やり水を吸わせて大きくしています」

「土耕栽培は、植物そのものの成長スピードに合わせて、細胞を育てます」

「水耕栽培は、細胞を育てるのではなく、細胞を膨らませているだけなので、大げさに表現すると、イチゴ味のする水を、食卓に提供しているようなものなのですよ」

“イチゴ味のする水！”

しかも、その水にはたくさんの化学肥料が含まれている。体にいい訳がないことは誰にでもわかります。

水上さんが農業を通じて目指すのは、“持続可能な風景（社会）をつくる”こと。

木に例えると、お祖父さんが木を植え、お父さんが木を育て、息子が木を伐り生活に利用する。この三世代にもわたる木の育成を継承維持しなければ、持続可能な風景（社会）

は保てません。息子たちも次世代のために、木を植え、育てなければ、豊かだった山の風景は、ハゲ山に変わってしまいます。

水上さんが有機栽培の作物の生産販売に専心する理由も同様で、体にいい農作物を提供しなければ、次代を担う子どもたちの健康が蝕まれ、生命力を奪ってしまいかねないからです。

水上さんが、農業に就いたのは今から４年前、２９歳の時でした。それまでは、建築の設計デザイナーをしていました。学生時代から才能が認められ、日本有数の設計事務所に入社しました。ところが、その事務所は東大、芸大卒のエリートが大勢を占め、水上さんは、学歴がない、語学力がない、都会派ではない（地方出身）の３つの“ない”の劣等感を強烈にいだいていました。

このコンプレックスを打ち破るために、トップ大学の大学院を受験し合格しましたが、先輩から「いまさら大学院に行って、何を勉強するんだ」と言われ、水上さんは、学歴を手に入れることによる劣等感の解消は無意味だと気づき、実力を極めるために、ニューヨークにある、世界に名の知られた設計事務所に入社しました。

語学力の壁は高く、しばらくは苦労しましたが、仕事で着実に実績を残し、収入も大幅にアップしました。（余談ですが、米国内の移動で、この事務所が所有するプライベートジェットに乗ることもしばしばあったそうです。）

ニューヨーカーのリッチな世界に足を踏み入れて、多くの仲間と出会い、会話をしていると、ある大金持ちの女性に、「あなたの目標は何なの」と尋ねられました。

水上さんが「年収を１億円にすることです」と答えると、

「１億円稼いで、何をするの」と女性は畳み掛けるように質問を重ねてきました。

「いい車に乗りたいの？」

「ゴージャスな家に住みたいの？」

「そういうモノを手に入れて、幸せって断言できるの？」と。

そして、この女性は水上さんに、

「ところで、あなたの実家は、何をしているの？」と質問をしました。

「先祖代々農業をしています」と水上さんが答えると、

「凄いじゃない。さっさと実家に戻って、農業をおやりなさい」と言ったのだそうです。

この女性との会話がきっかけとなり、水上さんは、華々しいニューヨークの生活を捨てて、帰国しました。

※以下、平堀が感じ取った水上さんの日本人魂に続く

◆水上さんが大切にするキーワード

持続可能な風景：意味は本文に記載

◆水上さんのコツコツ（継続していること）

大先輩らか話を聴く

農業のいろはを学ぶために、８０歳を超えた農業の大先輩を訪ね歩いています。

色々な作物の分野に名人が存在しますが、他の世界と同様に農業界も名人は頑固で、教えを請うても簡単には口を開いてくれません。ところが、８０歳を超えると人間性が丸くなり、丁寧に秘伝の手法を教えてくれます。

◆水上さんのパワー〇〇

おじいさん、おばあさんと会話すること

おじいさん、おばあさんは、“お国のために”という観点で物事を捉えて話すので、自分の器を大きくしてくれます。

◆平堀が感じ取った水上さんの日本人魂

水上さんは、ある米国人女性との会話がきっかけとなり、農業を継ぐ意思を固めましたが、彼女は、日本で開発された有機農法の技術が米国に輸出されていることや、ベジタリアンのレシピとして精進料理が参考にされている事実を水上さんに伝えていました。

彼女は、「日本の農業には、ことほどさように、素晴らしい風土や歴史、そして技術があるのに、あなたは何故、代々続く農業に従事しないの」と水上さんに問いかけていたのです。

水上さんは、幼少時代から農作業の手伝いをしていました。これが嫌で嫌で、農業には絶対に就かないと決めて、建築設計の分野に進みました。しかし、その後の人生を改めて振り返ってみると、諸外国に渡航すると、必ず農園に足を運んでいました。無意識にそうしていたそうです。

水上さんは、「農作業で土をいじっていると、この土地を開拓し耕作してきた先祖の思いが、心に入ってくる気がするんです」と、“言葉に上手く表せない”というもどかしさを笑みに浮かべながら語ります。

この女性の会話から、

「水上篤だからできること、日本人だからできることをやりなさい」

「それが、オリジナル（独自）な生き方なのよ」と、水上さんは示唆されたと受け取り、自分のオリジン（起源）を、今、生まれ育った山梨市牧丘町の土地と風景から感じ取っているのでしょう、

水上さんは、経営する農業生産法人株式会社 hototo の社名の由来を、

“なぜホトトかといえば、ニューヨークの都会生活に疲れてトホホとため息ばかりだった私が、週末郊外で過ごすと充実してため息が出なかった。都会と田舎は正反対だから、トホホの反対でホホト。これでは言いにくいので、ホトトにしたという次第。ふざけた名前の付け方であるが、自分の場所をいつまでも忘れないように、思いを込めて付けた名前である。”

と綴っています。
　水上さんが目指す、持続可能な風景を理解するキーワードが、ホトト。
　水上さんは、ホトトの風景で日本中を一杯にしたいのでしょう。
　安心安全な農産物を作っている人が、ホトト。
　この農産物を運ぶ人、販売する人、料理する人が、ホトト。
　農作物を食べた人が、ホトトとなり、
　このホトトの人たちが生活をし、仕事をしてホトトが連鎖拡大する。
　こんな風景を目に浮かべながら、水上さんは、今日も農作業をしています。

◆水上さんのプロフィール
職業：農業
所属：農業生産法人　株式会社 hototo（ホトト）（http://hototo.jp/）

◆農業ってどんな仕事？
　（13 歳からのハローワーク公式サイトに掲載されている村上龍氏の解説を抜粋しました）
　最近は会社をやめて新規農業者になる人も増え始め、人気の業種となりつつあるが、それなりの覚悟と計画性がなくては成功するのはむずかしい。独立して農業経営者になるには、土地・労働力・資本が必要である。自分がどのような農業をしたいのかがはっきりしていなければ、経営はできないと考えたほうがいい。また地域社会に関わることが多いので、その土地の慣習を理解し参加しようという意識がなくてはならない。農業は経営するほかに、企業形式の農業生産法人に就職するという手もある。経験があまり問われず、働きながら技術を習得することができるため、組織で働くことに抵抗がない人、経営する資金や経験が足りない人にはおすすめである。農業は自然と向き合い、災害に左右されたり、努力だけではままならないことも多いので、とにかく前向きでおおらかな人が向いている。なお農作物をつくっているというだけで、農業を成り立たせるのは難しい状況にある。収穫した農産物を加工し付加価値をつけるなど、多面的な戦略が必要だ。

◆農業に求められる能力
自然調和力：自然の摂理に身をゆだねて生活する力
直感力：古代脳に秘められた、論理を超えて、何かを感じ取る力
専門技術：安心安全な農作物を栽培する技術
営業力：自ら販売先を開拓する力
即行力：いいと教えられたことは、頭で検討するより、行動に移して検証する力